

3

- 1 [金] マルチモーダルセンシング共創コンソーシアム シンポジウム2024◎PLATアートスペース
- 2 [土]—3 [日] 市民と創造する演劇『地を渡る舟-1945 /アチック・ミュージアムと記者たち-』◎PLAT主ホール
- 2 [土] 三河トランペットアンサンブル 第1回演奏会◎PLATアートスペース
- 8 [金]—11 [月] 池坊豊橋支部創立80周年・青年部創立45周年記念花展◎PLATアートスペース
- 17 [日] 第36回豊橋素人歌舞伎保存会定期公演◎PLAT主ホール
- 19 [火] ブラットワンコインコンサート Femme Fatale「語りと営み」◎PLATアートスペース
- 24 [日] 和太鼓 志多ら 全国ツアー「たすき」豊橋公演◎PLAT主ホール
- 30 [土] 裕子ピアノ教室フロイデピアノコンサート2024 ~ Freude an der Musik ~◎PLATアートスペース

4

- 4 [木]—5 [金] 豊橋演劇鑑賞会 第301回例会 オペラシアターこんにゃく座オペラ『さよなら、ドン・キホーテ!』◎PLAT主ホール
- 6 [土] かとうえい子シャンソンコンサート2024 ~ふるさと豊橋~◎PLATアートスペース
- 13 [土] 山本愛花音 ピアノライブ~『Spring Aroma』ツアーファイナル~◎PLATアートスペース
- 17 [水] 立川志の輔 独演会◎PLAT主ホール
- 29 [月・祝] 時習館高校吹奏楽部 第33回 定期演奏会◎PLAT主ホール
- 29 [月・祝] ブラット2024年度プログラム説明会◎PLATアートスペース

PLAT NEWS

公益財団法人
豊橋文化振興財団情報誌
2024年3月-4月

vol. 66



TOYOHASHI
ARTS
THEATRE
PLAT

PLAT NEWS

プラットニュース



TOYOHASHI ARTS THEATRE
PLAT

表紙/岡本主人

『La Mère 母』+『Le Fils 息子』同時上演

撮影: 設楽光徳

裏表紙/『地を渡る舟

-1945 /アチック・ミュージアムと記者たち-』

企画・発行/公益財団法人豊橋文化振興財団

編集・デザイン/味岡伸太郎+有限公司STAFF

令和6年2月発行66号[隔月発行]



CONTENTS

目次

1 目次
表紙の顔

2 INTERVIEW:1
市民と創造する演劇
『地を渡る舟-1945 /アテック・ミュージアムと記者たち-』
みんな本当に演劇が好きで、純粋な演劇への愛情を感じます。

扇田拓也

5 INTERVIEW:2
PLATレジデンス事業 新作共同制作
アマヤドリ『牢獄の森(仮)』
体験でしか裏付けられない、得られない何かを書きたい。

広田淳一

7 REPORT
穂の国とよはし芸術劇場PLATプロデュース
『たわごと』観劇レポート
思いのグラデーションは、言葉だけでなく身体でも語られる。

9 INFORMATION
PLAT主催公演情報

13 PURA PURA
バラコの寄り道ぶらぶら
虫垂炎と夏バテ
桑原裕子

14 SPONSOR
SUPPORT
TICKET CENTER

INTERVIEW

インタビュー



扇田拓也[せんだ・たくや]
日本大学芸術学部演劇学科在学中1996年に、自身が脚本・演出を手掛ける劇団「ヒンドゥー五千回」を旗揚げ、2018年4月の最終公演を機に劇団名を「空観」(くうがん)に改め再起動。野田秀樹が立ち上げた「東京演劇道場」の1期生として2019年より始動。



広田淳一[ひろた・じゅんいち]
1978年生。劇作家、演出家、俳優。2001年、東京大学在学中に「ひょっとて乱舞」を旗揚げし、現「アマヤドリ」主宰。主にオリジナル戯曲の上演を行うが近年は古典の演出も手掛ける。さりげない日常会話からきらびやかな詩的言語までを駆使した変幻自在の劇言語と、クラッピングや群舞など、音楽・ダンス的な要素も節操なく取り入れた自由自在の身体性を活動の両輪としている。リズムとスピード・論理と情熱・悪意とアイロニー、などを軸に「秩序立てられたカオス」としての舞台表現を追求している。

COVER

表紙の顔



『La Mère 母』+『Le Fils 息子』同時上演
岡本圭人[おかもと・けいいち]
音楽活動に加え、バラエティ・舞台・TVドラマ・ラジオ・CMなどマルチに活躍。18年から20年まで、アメリカ最古の名門演劇学校であるアメリカン・アカデミー・オブ・ドラマティック・アーツへ留学。卒業後、『Le Fils 息子』(21)でストレートプレイ初舞台・初主演を飾る。近年の主な出演作に、【舞台】『チョコレートドーナツ』『ハムレット』(23)、『4000マイルズ〜旅立ちの時〜』『盗まれた電撃 -パーシー・ジャクソン ミュージカル-』『M. バタフライ』(22)、『Le Fils 息子』(21)、【ドラマ】『大奥 Season2』(23・NHK)、『リズム』(23・CX)、『育休刑事』(23・NHK)など。1月29日、舞台『ラヴ・ターズ〜 2024 New Year Special 〜』に出演。



市民と創造する演劇『地を渡る舟-1945 /アテック・ミュージアムと記者たち-』
NHK連続テレビ小説「らんまん」で脚本を担当し、いま最も注目をあつめている劇作家の長田育恵さん。実在の人物を丁寧な取材で脚本を書きあげる長田さんが手がけた本作を、オーディションで選ばれた市民出演者とプロのスタッフと共に上演します。

INTERVIEW

インタビュー



市民と創造する演劇
『地を渡る舟』
-1945 /アテック・ミュージアムと記者たち-

令和5年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成事業
3月2日[土]、3日[日]14:30開演
作=長田育恵
演出=扇田拓也
音楽=棚川寛子
出演=オーディションで選ばれた市民 / 大庭裕介、百花亜希
会場=PLAT 主ホール

風の言葉を 耳を傾けるのは、

矢作—— コロナだけではなく、舞台芸術を取り巻く様々なことが動いたここ数年間演劇を続け、その中で考えたことなどはありますか。

扇田—— 劇場からお客さんが遠のくという時代が来るなんてみじんも思っていなかった。コロナで気付いたのは、やはり日本人は働きすぎだったということ。時間ができ、趣味を持つ人が増え、僕も庭いじりとか、演劇以外にできることが見つけられた。働き過ぎだから、八つ当たりみたいなセクハラもパワハラも起きたし、被害者を生んでしまった。レベルの高い作品の前にまず作り手の僕たちが幸せで楽しく作らないことには、やる意味があるのかと疑問を持ち始めました。そこに立ち返ると、演劇に命をかけてはいけない、そもそも演劇は楽しむためだから、幸せに楽しく創作することを前提に、やれるだけのことをやる。公演が急に中止になることを何度も経験し、生活と演劇に境界線を作らなくなった。演劇も生活の一つだし、生活の中に演劇がある。コロナが開け、急に演劇の公演が増え始めたから、休み休みやった方がいいとよく言っています。

演劇は、それぞれ台詞の量や出番の数が違う。みんなが同じだけ頑張るのではなくても成立する。100

頑張れる人と20しか頑張れない人が同じ作品に出てもいい。市民も、若くて元気で体力があり余っている若者や、お年を召して腰とか膝とか痛いけど演じるのは好きだという人にも出番がある。それぞれがやれるだけのことをやって楽しむ。プロの演劇も、本当はそれでいい。本番直前に役者さんが、「風邪ひいて熱が出ています」と言ったら、「休んでください。今日は通し稽古はやめますので、みんな休みましょう」でいい。誰か一人に負担がかかるのは、健康的ではない。遅刻する人がいれば、遅刻してしまう理由が何かあったのだろうと許し合う関係。何かを自分の方に引き寄せるのではなく、あげていけばいい。結果、お互いが差し出していくことで、世の中が成り立てばと。

矢作—— そのようなことが、市民や高校生と創る演劇でやれたらと思う。お互いの足りないところを補完しながら作品を作り、終わった後もそういう関係性が継続でき、社会として地域として、より豊かなものが生み出し得るのではないかと期待しているのです。扇田—— 演劇は体と心が維持できる限りは、常に楽しいものとして付き合っていくと、失敗もなければ成功もない。追い詰められる必要もない。プロアマの境目を作る必要もない。市民と創造する演劇は、みんな



みんな本当に演劇が好きで、 純粋な演劇への愛情を感じます。

演出 扇田拓也

聞き手 矢作勝義 穂の国とよはし芸術劇場「アチック・ミュージアム」芸術文化プロデューサー

本当に演劇が好きで、仕事が終わってから稽古場に足を運んでくる。すごく尊いし、純粋な演劇への愛情を感じます。

矢作—— 劇場としては、参加してくれる人たちの純粋な思いを受け止めて、何か別なかたちで返してあげられる状況を作り、やりがい搾取にならないようにと思っています

扇田—— 公共劇場のバックアップで、「自分の新しい才能が開花したかも」という思いを持ってもらったり、うまく利用してもらいたいですね。

矢作—— 今回取り上げた『地を渡る舟』は、てがみ座の初演では非常に具象的な作品作りをしていて、再演は抽象的な方向で演出されていました。今回、さらに様々な条件が変わるにあたって、どんなことを目指したいと思っていますか。

扇田—— てがみ座の時のように、僕が音楽を選曲した場合は、手持ちの音源から選ぶか、探しにくいかなできない。棚川さんに音楽を担当してもらった場合は、演技を見ながら「ここにはこういう音が合うだろう」と、一から作れ、音楽的にも超抽象的な当て方も可能になり、初演から再演にかけてとは比にならないぐらい抽象度が上がります。今回は、てがみ座の頃の『地を渡る舟』から大きな飛躍ができそうです。脚本の長田育恵さんが強い言葉で書いているので、俳優が相当熱量を持っていかないとしゃべれない台詞ばかりで、市民の皆さんも大変。でも意外と不安を感じていない。どんどん抽象性を増し、一人一人の力量だけで勝負する演劇とは違って、「え、『地を渡る舟』はこんな作品にもなるんだ」というところまでとり着いたら楽しいですね。

矢作—— 渋沢敬三と宮本常一の物語が中心となって描かれ、その中で奥三河の花祭が出てくる作品を豊橋でやるにあたって、どんなことをお考えなのでしょうか。

扇田—— 今回お話をいただいた時は、うれしくて運命的なものを感じました。僕が結婚して子どもを育てた府中に、宮本常一も住んでいた。お芝居の中でも、戦時中に渋沢邸の資料を保谷に借りた倉庫に移しますが、僕は今、西東京市(旧保谷市)に住み、家は、民具ではないが、舞台の小道具の倉庫みたいな家になっている。この花祭が育った奥三河に近い豊橋に引き寄せられたという感覚もあります。

地域にある文化を広く知れ渡らせる媒体として、演劇も一つの役割を担っています。花祭は全国的に知らない人も多いが、鎌倉時代からある祭りが、いまも継承されている。文化に限らず世界で起きていることを、演劇を通じて知ってもらおう。演劇が失われなためにも、演劇そのものが失われかける文化を保存するための役割も担いたい。

矢作—— 日本が戦争の泥沼から終戦を迎えたあたりの、失われつつあるものを残していこうとした人たち

の話が描かれているのですが。今の日本も、文化や歴史の継承も含めてさまざまなものが失われていく、似たような状況ではないだろうかという危惧も感じます。

扇田—— 民俗学者が戦争によって被った被害のことも、失われていく文化のことも、過去にあったことを経て、今起きていることに目を向け、自分たちはどう生きていったらいいのかを考える。今も、いろんな情報が飛び交って、何を信じていいのか分かりにくい世の中です。歴史をどう捉えるかはいまだにいろんな意見があるのですが、戦争を賛美することだけは僕も長田さんも全く容認できない。最近、沖縄でお芝居することが多く、八重山諸島の人たちはアメリカの基地問題に文句を言っているように思われがちですが、自衛隊にも、迷彩服でその辺をうろろするな、戦争のにおいを出すな。それ自体が嫌なんです。そこを伝える新聞と、伝えない新聞もあります。ちゃんと現実を見ないと、太平洋戦争も、いつのまにか戦争になってしまった。遠い国のお話だと思っていたら、すぐに日本にも来るだろうなという危機感があります。

矢作—— 市民の人たちと一緒に作品を豊橋で創ることで、どんなことを期待していますか。

扇田—— 市民の皆さんは、自分の中にある未知なるものを発見するために取り組んでいると思います。僕は最大限その能力を引き出そうとしますから、一人一人思いつき輝いてほしいという思いと、市民のために文化を守ろうと頑張った民俗学者の熱い魂をぶつける台詞を市民の人たちが口にする。民俗学者が守ろうとした市民の文化、それを持っているのが私たちがなのだという思いで舞台に立ってもらえたら、きっと気持ちが燃え上がると思います。それを感じながらやっていただけたらうれしい。

矢作—— 今回参加してくれている人の中には、前回の『夏の夜の夢』にも出演してくれた人もいらっしゃいます。今回ニュー扇田をどう見せられるのか、とても期待しています。

扇田—— 『夏の夜の夢』の作風とは戯曲の本質も違います。戯曲を読み解き、役をもっと掘り下げるとか、そういう細かい話し合いとか指示を出します。「扇田拓也がこんな人だったとは知らなかった」という面も見ることになります。市民の方は演劇の楽しさと素晴らしさと、かつ難しさも体験することになります。そこをしっかりとフォローして、ちゃんと計画を立てて頑張れたら、お客さんも、きっと素晴らしい演劇の体験ができると思います。これは必見です。

矢作—— 長田さんの名前を知っている人を含め、お芝居をあまり観ない人もぜひこの作品を観ていただきたいですね。

扇田—— 長田さんは今や、いろんなところで引っ張りだこです。朝ドラの『らんまん』を書いた脚本家が、これだけ力のある劇作をし、それに市民がコラボレーションしています。ぜひ観に来ていただきたい。

PLATレジデンス事業 新作共同制作

アマヤドリ『牢獄の森(仮)』

男はつらいよ、じゃねえんだよ。

6月14日[金]19:00開演

15日[土]、16日[日]14:30開演

作・演出＝広田淳一

出演＝相葉るか、相葉りこ、沼田星麻、大塚由祈子、
徳倉マドカ、宮川飛鳥、ほしのりなほか

会場＝PLATアートスペース

滞在制作期間＝6月3日[月]～16日[日]



INTERVIEW

聞き手 矢作勝義 穂の国とよはし芸術劇場PLAT 芸術文化プロデューサー

体験でしか裏付けられない、得られない、何かを書きたい。 作・演出 広田淳一

PLATでは、2016年から「アーティスト・イン・レジデンス」を実施し、17年以降はダンスに特化して制作に取り組んできました。そして2024年度は新たに、首都圏で活動する劇団アマヤドリが滞在制作し、その最後に作品上演を行い、成果を公演として発表します。日常とは異なる環境で、創作に集中し、地域の人たちと触れ合うアウトリーチや公開稽古等の地域交流プログラムを通して、市民が多様な芸術活動に触れることで、舞台芸術とその創造環境の裾野を拡げます。

矢作—— コロナ禍で、演劇は以前とどう変わり、次にどんなことを目指していきたいのでしょうか。

広田—— うちが公演が中止になったのは幸いにして1回だけでしたが、劇団アマヤドリの20年以上のポリシーとして、何が何でもポシヤらずやろうとここまでやってきました。それがこんな形でついでるとは、一時期しょんぼりしました。100%芸術にかけ、万全の状態です。やることを今も目指しているのですが、そうはいかないぞと、いろんな意味で味わった数年間でしたね。それでもやっていくんだ、というある種の諦めを含んだモチベーションの持ち方にも慣れ、劇団メンバーの出産・育児などの出来事も取り込みつつ活動していきたいと思っています。

ここ数年で地域での上演機会が減って、東京以外の場所で公演をさせていただくのは本当に久しぶりなので、ワクワクしています。コロナの時には、感染症対策はどうしたらいいかなど、創作ではないところでずいぶん苦労しました。今まで惰性でやってきてしまったことが是正された部分もあるのですが、同時にある種の息苦しさも感じ出しています。もうちょっと、他罰的な感覚ではなく、ポジティブな雰囲気やれるようになったらいいなとは思っていますね。

SNSなどが発達して、リアルなコミュニケーションが貧しくなっている中で、コロナはそれを加速させた側面があると思います。今、社会的にもその揺り戻しが来ていると思うので、もう一回リアルなコミュニケーションを取り戻したい。そういったモチベーションをちゃんと引き受けられる集団でありたいと思います。

矢作—— コロナ禍で、演劇は以前とどう変わり、次にどんなことを目指していきたいのでしょうか。

広田—— 安穩とは続かず、どうなるか分からない世の中なので、覚悟を持たなければと思います。演劇のいいところは、台詞が飛ばうが何だろうが終わっていく。失敗はあったがまあ終えられたなという体験、それが次もう一回に連なっていくと思うんです。ある意味で失敗できたり、悪いことを言えたり、そういう場所にみんな飢えている部分もあると思うから、多少の間違えが許容される場所を残さないといけないと思いますね。みんなとどんどんいい子でなきゃいけない。一回間違えるとそれが許されないという同調圧力が嫌なんです。

矢作—— 今回は「東京で上演した作品を豊橋で」ではない形となりますが、豊橋でどんなことを達成したいのでしょうか。

広田—— ここ何年か、日本の今、隣の家で起きてもおかしくないというレベルの、日常的なテーマを選ぶことが多かったのですが、せっかく広い空間で、日常から切り離して、最後に創作の詰めの作業もさせていただけだし、若干日常から飛躍がある話をやれるチャンスなのではないかと思っています。

矢作—— アマヤドリは、比較的架空の世界、現実とはちょっと違う世界を描いている時から、最近は身近な人間関係がうまくいっていない状況を緻密に描いていたと思うのですが、今回、具体的にはどのようなことを描きたいのでしょうか。

広田—— 未来やファンタジーという設定を使って、現在の我々が感じていること、思っていることを書きたいですね。今私たちは非常に特殊な時代、環境を生きていると思うんです。企画を練る時、ChatGPTは「こういう設定の劇を」と言うと、1秒でとんでもない量の答えを返してくる。劇団でハラスメントのルールを作ろうと思えば、すぐに10カ条みたいものを出してくる。どんなハイスペックな人間でもかなわない速度でサジェストしてくれる存在がいるということですが、ある種みんなの脳みそが裏側でどこかつながっている時代を生きつつあるわけです。だけどリアルな人間関係というのは、そういったものを超えた何かなんじゃないかと。どうしても最後は腹に落ちないと納得しない、体験でしか裏付けられない、得られない何かは、いつまでたっても残ると思うんですね。昔に戻りましようとは思わないですし、いい時代だと思うんですが、ともあれ、人類があまり住んだことのない場所に私たちは住みつつある。その辺をうまく、いろんな形で物語の中で書いていけるといいのかなと思います。

矢作—— 今回は、劇団員だけになりそうですか。

広田—— 客演さんも呼ぶつもりです。地域ゆかりの方も呼びたいですね。ある種の信頼関係の中でやれたという意味では、劇団の強さを感じた数年間でしたが、反省として、その関係性の中に閉じこもり過ぎたというきらいもあるんです。東京から出られなくなったし、劇団の人間関係の中で内向きにもなった。それをもう一回開いていきたい。

矢作—— 劇場としても、劇団と劇場が一緒になってということが可能か、単に作品を作るだけではなく、作品を作るプロセスで、どう市民や地域との関係を作っていくか、アマヤドリという劇団と可能性をどう開いていけるか、とても楽しみです。

広田—— 責任重大ですね。僕らが大失敗をやらかすと、あの企画はやめとこうということにもなりかねませんから(笑) 何とかうまくやれるといいですね。

矢作—— 人が年齢を重ねていくように、劇団としても今回の経験が蓄積となり活動と表現の幅をさらに広げる機会にしてもらえればと思います。

日常の中で言葉をぐっと飲み込んだこと、違和感を感じながらも仕方なく受け入れてしまったという経験は、誰にでも覚えがあるはずだ。近年の桑原裕子は、そんな“飲み込みそうになったこと”を一旦取り出し、解剖し、再検証するような作品を生み出している。新作『たわごと』では、引退したある作家の息子たち2人を軸に、“言葉の油断ならなさ、不確かさ”について斬り込んだ。

崖の淵に建つ洋館風の屋敷で暮らす作家・越間亭柁のもとに、関係者たちが呼び寄せられた。長男・需(渡辺いっけい)と妻・菜祇(田中美里)は、一見仲睦まじく見えるが、不妊治療と流産をきっかけにギクシャクした状態が続いている。次男の心也(渋川清彦)は父・亭柁に裏切られた思いがあり、長年父と向き合えずにいた。そして亭柁の元秘書・解子(松金よね子)は、彼の元愛人でもある。彼ら呼び寄せたのは、亭柁の世話をしている元看護師の黒江(松岡依

都美)と若い日系フランス人の医師・テオ(谷恭輔)で、2人は余命幾許もない亭柁が遺言書を用意していることを明かす。亭柁の“悪筆”が唯一解読できる、という理由で、解子が遺言書を読み上げるが、前置きだけで10ページ、全11章にも及ぶ遺言書の中で、心也の心を波立たせたのは、親子の不和の原因であり亭柁絶筆のきっかけとなった、亭柁の未発表の自叙伝。その出版にあたり、亭柁は心也が書いた弔辞を巻末に載せたいというのだ。

遺言書開示を経て、登場人物たちはそれぞれ異なる反応を見せる。状況を受け入れ、今際の際の父の希望に応えようとする需、そんな夫と気持ちが通じず歯車が狂っていく菜祇、父の言葉の真意を図りかねて苛立つ心也、亭柁の言葉の重みを重視する解子、元気だった頃の亭柁を知りつつ、医療従事者としての一線を保つ黒江とテオ。渡辺は、自信のなさゆえに寛大な素振りを見せようとする需を愛嬌と哀愁を

取材・文 熊井玲

思いのグラデーションは、言葉だけでなく身体でも語られる。

REPORT

もって演じ、田中は不安定な精神状態の菜祇を感情の振れ幅大きく表現する。渋川は繊細さ故にわざと悪ぶって見せる心也を愛すべき存在として立ち上げ、松金はコミカルさの中に解子の内に秘めた情熱をチラリと覗かせる。松岡は黒江の心の奥にある悲しみを明るさと包容力で覆い尽くし、谷は“亭柁に命を助けられた”というテオの過去をさらりと語って、亭柁との関係の深さを印象付けた。

登場人物たちの輪郭が濃くなっていくにつれ、たびたび描かれるのが“本当の思い”を巡る諍いだ。“本当の気持ちを言ってもらえない/本当の気持ちが言えない”というフラストレーションは現実でもよく起きることだが、「たわごと」の登場人物たちは決して朗々と感情を吐露したり、言葉で相手をやり込めたり、説得したりというようなことはしない。しかし最終的にはお互いを認め、受け入れていく。その様子を見てふと“本当の気持ち”って何だろう?という思いに囚われた。

それは、「たわごと」稽古場を取材したときに桑原が言っていた「戯曲に書かれたことをそのまま信用しないで」という言葉が脳裏にあったからかもしれない。稽古序盤、まだ読み合わせをしている段階だったが、桑原はキャストに、セリフの背景にあるものを1つひとつ想像させようとしていた。例えば「うん」というセリフは、どのような気持ちの揺れを経て搾り出された「うん」なのか、その「うん」がその次の「うん」とはどのように違っているのかを想像してほしい、といった具合に。実際、「うん」と返事しつつも納得していないことや、全く違う可能性を考えながらも「うん」ということもあるわけで、発した言葉は「うん」でも、そこに至る気持ちは文字通りの「うん」とは限らない、と桑原はさまざまな例を挙げながら説明した。

その目線で「たわごと」の上演を振り返ると、登場人物たちはセリフだけでなく身体や行動によって、実に多くの情報を発していた。ある時は発した言葉と裏腹



穂の国とよはし芸術劇場PLATプロデュース 『たわごと』観劇レポート

作・演出＝桑原裕子
出演＝渋川清彦、田中美里、谷 恭輔、松岡依都美、松金よね子、渡辺いっけい
2023年11月16日[木]－19日[日] 穂の国とよはし芸術劇場PLAT 主ホール
2023年11月23日[木・祝] ロームシアター京都 サウスホール
2023年11月26日[日] 岡山芸術創造劇場 ハレノワ 中劇場
2023年12月8日[金]－17日[日] 東京芸術劇場 シアターイースト

な態度に出たり、またある時は抑えた感情を背中で感じさせたりと、セリフでは表現できない感情のヒダや思いのグラデーションを、言葉と身体の間方を使って表現していた。桑原作品において、登場人物たちの感情はセリフの上だけでなく、身体でも細やかに語られるのだ。

なお、本作が作家の言葉や作品を巡る物語であることにちなみ、「たわごと」上演前のインタビューで桑原に、「作家には、自分の作品が後世まで残ってほしいと話す人も多いが、桑原さん自身はどうか」と質問した。すると桑原は「そういう思いは全くない」と否定しつつ「私の言葉や作品を愛していると思ってくれた人々には、実体としての桑原裕子がそこにいないこと、もう会えないことを悲しんでほしい」と即答した。冗談めかしてはいたが、言葉のみを偏重するのではなく、言葉と共に人間そのものを凝視してきた作家・桑原裕子だからこそ、説得力がある言葉だと思ふ。

PICKUP

市民と創造する演劇

『地を渡る舟』 -1945／アテック・ミュージアムと記述者たち-

3/2 [土] 14:30 開演

3月2日のみ 

3/3 [日] 14:30 開演

好評発売中

2023年度の「市民と創造する演劇」は、NHKの連続テレビ小説「らんまん」の脚本を担当し、注目を集める劇作家・長田育恵の『地を渡る舟-1945／アテック・ミュージアムと記述者たち-』(劇団てがみ座で2013年初演・2015年再演)を上演します。てがみ座本公演でも演出を務めた扇田拓也を迎え、棚川寛子の音楽とともに贈ります。

昭和20年春、来るべき本土決戦が聞こえる中、敗戦の日を予期し、各地の農家を訪ね歩いているひとりの男がいた。その日まであと4ヶ月——。「その日」を迎えたとき、ただちに日本を立て直すために。

【あらすじ】

瀬戸内海の小さな島で生まれた宮本常一。旅する民俗学者と呼ばれた彼は、日本列島を隅々まで歩きぬき、人々の営みをありのままに見つめ、受け継がれてきた言葉に耳を澄ませた。そんな彼の活動を支援したのは、戦時下において日銀総裁を務めた渋沢敬三だった。敬三は私財を投じて自宅の敷地内に「アテック・ミュージアム(屋根裏の博物館)」を作り、常一をはじめ、若き民俗学者たちと共に、この国を書き留めようと尽力したが、戦時下に堕ちていく中で、アテック・ミュージアムに集う若き民俗学者たちは戦争の大波に翻弄され飲み込まれていく。

作＝長田育恵
演出＝扇田拓也
音楽＝棚川寛子
出演＝オーディションで選ばれた市民／大庭裕介、百花亜希
会場＝PLAT主ホール
料金＝[全席指定]一般2,000円、U25 1,000円、高校生以下500円
※2日(土)は終演後トークあり。登壇者＝扇田拓也、長田育恵
※3日(日)は視覚に障がいのあるお客様のための舞台説明会あり(要事前予約)。

【関連企画】

劇場ツアー

2/28 [水] 14:00～15:00

当公演の舞台裏を間近で見られる劇場ツアーを行います。本番に向けて、仕込(準備)がされている状態の主ホールや、演奏で使われる楽器の見学など、関わっているクリエイションスタッフのお話と共にご案内いたします。

会場＝PLAT主ホール
参加費＝無料
対象＝どなたでも
定員＝15名(申込順)
申込方法＝①プラットチケットセンター窓口・電話(0532-39-3090) ②劇場ホームページの専用申込フォームより申込み。



市民と創造する演劇

耳を傾けるのは、
風の言葉

昭和20年春、来るべき本土決戦が聞こえる中、敗戦の日を予期し、各地の農家を訪ね歩いているひとりの男がいた。その日まであと4ヶ月——。「その日」を迎えたとき、ただちに日本を立て直すために。

演出 扇田拓也
作 長田育恵
音楽 棚川寛子
出演 オーディションで選ばれた市民／大庭裕介、百花亜希

2024
3/2-3
sat sun
PLAT主ホール

両11:30開演(開演は開演の30分前) ■作——長田育恵 ■演出——扇田拓也 ■音楽——棚川寛子
穂の国とよはし芸術劇場

◆お問い合わせ(休演日を除く)0532-39-3090
プラットチケットセンター
TEL 0532-39-3090
〒110-0882 東京都西千代区新町12-3番地
http://toyohashi.at.jp

立川志の輔 独演会

4/17 [水] 18:30 開演

古典、新作問わず落語に新しい息吹を吹き込む、大人気の立川志の輔による独演会を開催いたします。
会員先行＝WEB抽選のみ。2月22日(木)23:59まで。
※申込方法詳細はホームページでご確認ください。
一般発売＝3月9日(土)
出演＝立川志の輔
会場＝PLAT主ホール
料金＝[全席指定]一般4,500円ほか
※一般発売日初日は、お一人様2枚までの枚数制限あり。



大道芸 in とよはし 2024

5/4 [土・祝]

5/5 [日・祝]

マイムにアクロバット、JAZZなどの超豪華ラインナップ。世界で活躍する大道芸人達がPLAT北側広場など屋外でパフォーマンスを行います。
会場＝PLAT北側広場ほか ※詳細は決まり次第、ホームページで公開いたします。
料金＝無料

【ボランティアスタッフ募集】

『大道芸 in とよはし』と一緒に盛り上げてくれる仲間を募集します!
業務時間＝各日10:00～18:00を予定
参加条件＝18歳以上で事前説明会どちらか一日に参加できる方
事前説明会＝4月5日(金)19:00～21:00、6日(土)13:00～15:00
会場＝PLAT研修室(大)
定員＝40名程度(先着順)
申込方法＝3月31日(日)までに①参加申込書を窓口、FAXにて提出②劇場ホームページの専用申込フォームより



プラット2024年度 プログラム説明会

4/29 [月・祝] 14:00 開演

2024年度、プラットがお贈りする主催・共催プログラムをご紹介します。
会場＝PLATアールスペース
料金＝無料(要整理券または劇場ホームページから要申込)
※整理券はプラットチケットセンターにて4月1日(月)より配布開始



託児サービス対象公演

要予約。生後6ヶ月以上。
お一人様500円。お申込み、お問合せは
プラットチケットセンターまで

**PLATレジデンス事業 新作共同制作
アマヤドリ『牢獄の森(仮)』**

6/14 [金] 19:00開演
6/15 [土] 14:30開演
6/16 [日] 14:30開演

会員先行＝4月13日(土)
一般発売＝4月20日(土)
作・演出＝広田淳一
出演＝相葉るか、相葉りて、沼田星麻、大塚由祈子、徳倉マドカ、宮川飛鳥、ほしのりなほか
会場＝PLAT アートスペース
料金＝[全席自由・日時指定・整理番号付]一般4,000円、U25 2,000円、高校生以下1,000円



2019年上演『天国への登り方』撮影：赤坂久美

『La Mère 母』

6/29 [土] 13:00開演
6/30 [日] 13:00開演

6月29日
13:00のみ

『Le Fils 息子』

6/29 [土] 18:00開演

フランス発世界を席巻する作家ゼレールが放つ話題作・新作の二本立て！2021年度に上演し、高い評価を得た『Le Fils 息子』の再演、また家族三部作のラストを飾る『La Mère 母』を同じキャストで同時上演します。

会員先行＝3月23日(土)
一般発売＝4月6日(土)
作＝フロリアン・ゼレール
翻訳＝齋藤敦子
演出＝ラディスラス・ショラー
出演＝
『La Mère 母』若村麻由美、岡本圭人、伊勢佳世、岡本健一
『Le Fils 息子』岡本圭人、若村麻由美、伊勢佳世、浜田信也、木山廉彬、岡本健一
会場＝PLAT主ホール
料金＝[全席指定]『母』『息子』S席セット券18,000円、S席10,000円、A席7,000円ほか
※29日(土)『La Mère 母』は、聴覚に障害のあるお客様のためのポータブル字幕機の貸出あり(要事前申込)。
※発売日初日は、お一人様1申込につき1公演2枚、または『母』『息子』S席セット券2組までの枚数制限あり。

【あらすじ】
『La Mère(ラ・メール) 母』
アンヌはこれまで自分のすべてを捧げて愛する子どもたちのため、夫のためにと家庭を第一に考えて生きてきた。それはアンヌにとってかけがえない喜びで至福の時間であった。そして年月が過ぎ、子どもたちは成長して彼女のもとから巣立っていつてしまった。息子も娘も、そして今度は夫までも去ろうとしている。家庭という小さな世界の中で、四方八方から逃げ惑う彼女はそこには自分ひとりしかないことに気づく。母は悪夢の中で幸せだった日々を思い出して心の万華鏡を回し続ける――。

『Le Fils(ル・フィス) 息子』
両親の離婚後、学校にも登校せず一日中独り行くあてもなく過ごしていたニコラは、とうとう学校を退学になってしまう。そんなニコラの様子を聞いた父親ビエールは、離婚・再婚後、初めて息子と正面から向き合おうとする。生活環境を変えることが、唯一自分を救う方法だと思えたニコラは、父親と再婚相手、そして年の離れた小さな弟と一緒に暮らしはじめるのだが、それでも自分の居場所を見つけられずにいた。

**ONE CON CONCERT
ワンコインコンサート**

**若手音楽家育成事業
プラットワンコインコンサート**

「若い音楽家には活躍の場を、お客様にはより音楽を楽しめる機会を」と企画されたPLATオリジナルのワンコインコンサートです。500円で贅沢なひとときをお過ごしください。
会場＝PLATアートスペース
料金＝[全席自由・整理番号付]500円
[助成]文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等活性化・ネットワーク強化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会

「Fusion of Jazz & Classic」

2/15 [木] 14:00開演 **好評発売中**
デュオ・ミスコラール
松山美津穂(ピアノ)、伊井夕雛(ピアノ)



松山美津穂 伊井夕雛

「語りと営み」

3/19 [火]
18:30開演
Femme Fatale

安間誉和(ピアノ・作曲)、山本大地(ヴァイオリン)、鈴木崇朗(バンドネオン)、悦木啓人(ベース・クラリネット・作曲)、長谷川志樹(ピアノ)

好評発売中



山本大地 鈴木崇朗



悦木啓人 長谷川志樹

**WORKSHOP
ワークショップ**

**小・中学校・特別支援学校に
出向いてのワークショップ&
ワークショップファシリテーター
養成講座
報告会 2023**

プラットが実施する教育普及活動の報告を聞き、意見交換会をします。
2/25 [日]
10:30～12:30
【第1部】小学校で実施しているワークショップを体験する進行役＝すずきこーた(演劇デザインギルド)
定員＝20人(応募多数の場合は選考)
会場＝創造活動室B
14:00～16:00
【第2部】報告&意見交換会
定員＝40人(申込順) 会場＝研修室(大)

<共通事項>
参加費＝無料
対象＝高校生以上
申込締切＝
[第1部+第2部]2月18日(日)17:00
[第2部のみ]定員に達するまで。
※第1部のみ参加はできません。
申込方法＝①プラットチケットセンター窓口・電話(0532-39-3090)②劇場ホームページの専用申込フォームより申込み。
[助成]文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等活性化・ネットワーク強化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会

**平田満企画「対話を考える」vol.6
齋藤環
『オーブンダイアログをめぐる
対話』**

4/13 [土] 13:30～17:00
プラット・アソシエイト・アーティストである俳優・平田満の発案による「対話を考える」の第6弾として、今回は、『オーブンダイアログとは何か』(医学書院)の著者で、オーブンダイアログを第一線で実践している精神科医である齋藤環さんをお招きします。
会場＝PLAT 創造活動室A
参加費＝1,000円
対象＝高校生以上(演劇経験不問)
定員＝40人(選考、ご家族や同じ職場のグループ等での参加者優先)
申込方法＝2月29日(木)17:00までに①参加申込書を窓口、FAXにて提出 ②劇場ホームページの専用申込フォームより申込み。

**高校生と創る演劇
出演者&スタッフ募集**

公募による高校生出演者とスタッフが、劇場やプロのスタッフとともに上演する演劇の第10弾。今年は演出・振付に下司尚実を迎え上演します。
対象＝2006年4月2日～2009年4月1日生まれで、稽古・公演日11月2日(土)、3日(日)、4日(月・祝)に参加できる方。
定員＝15人程度
審査＝5月18日(土)、19日(日)のいずれかか5月26日(日)
申込方法＝4月26日(金)17:00までに①劇場ホームページの専用申込フォーム ②参加申込書に必要事項を記入の上、窓口にて持参。

**DANCE RESIDENCE
ダンスレジデンス**

**豊橋アーティスト・イン・レジデンス
ダンス・レジデンス
2023-2024
大森瑠子**

ヨコハマダンスコレクション2023 コンペティション I において「穂の国とよはし芸術劇場PLAT賞」を受賞した大森瑠子が、プレ滞在として劇場や地域のリサーチ、過去作品のショートパフォーマンスを行います。
2/17 [土] 14:30～14:50
大森瑠子 ショートパフォーマンス
会場＝PLAT 創造活動室B
参加費＝無料
定員＝25人(申込順)
申込方法＝①プラットチケットセンター窓口・電話(0532-39-3090)②劇場ホームページの専用申込フォームより申込み。



大森瑠子

**TICKET CENTER
チケットセンター**

**チケットの購入・お問合せ
プラットチケットセンター**

●劇場窓口・電話
0532-39-3090[休館日を除く10:00～19:00]
●オンライン
http://toyohashi-at.jp[24時間受付・要事前登録]

●販売初日はオンライン・電話のみ取り扱い。翌日以降、残席がある場合は窓口販売あり。

U25・高校生以下割引ご案内

ほぼすべての財団主催公演に、若い人にお得な料金を設定しています。
●料金＝U25[25歳以下]:公演ごとに指定する席種の半額/高校生以下:1,000円
●購入方法＝各公演の一般発売初日から取扱い。
●その他＝本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。座席の指定はできません。要・入場時本人確認書類提示。一部例外あり。詳細は各公演チラシ・HPにて。



**プラットフレンズ募集
入会金・年会費無料**

●特典
1 公演情報をメールでご案内します。
2 インターネットでチケット予約ができます。
3 主催公演のチケットを一般発売に先がけてご予約できます。
※劇場窓口またはホームページから登録いただけます。

虫垂炎と夏バテ

穂の国とよはし芸術劇場 芸術監督
桑原裕子



昨年の大晦日。恒例となった実家での年越しで家族や友人たちと1年を振り返っていたとき、「今年は私たちがたくさん心配をかけました」と母に言われてハッとしました。喉元が過ぎて忘れかけていたけれど、昨年一月に父が虫垂炎で入院、夏には母が夏バテの悪化で伏せていたのです。

いつも健康が取り柄だという両親が、立て続けに調子を悪くしたのは初めてのこと。虫垂炎や夏バテ、と書くと軽いものに思えますが、父は糖尿病も抱えているだけに虫垂炎の治療でも一ヶ月入院しなくてはなりません。私も母も、一時は万が一の際を覚悟するくらい心配したのに、今じゃすっかり回復した父は、ちょうどいいダイエットになったと笑っています。「ライザップに行ったようなもんだ」って。まったくのんきなものです。

でも、病気になって良かったと言える部分もあります。母曰く、虫垂炎をきっかけに“愛を取り戻した”らしいのです。

少し前まで、母は父と距離を感じていました。家事をしても感謝しない父。もう期待しないと決め、冷や冷やした関係に慣れてゆく寂しさ。「私、卒婚するから」少し前に流行った言葉を、母がしょっちゅう口にしてる時期がありました。

ですが激しい腹痛に苦しむ父を連れ、コロナ禍でなかなか受け入れてくれる病院が見つからないなか、必死に病院を回って看病しながら、母は「この人のことがこんなに大事だったなんて!」と気づいたといいます。同時に父は、そんな献身的な母に「お前がいなきゃ生きていられなかった!」と、激しく感謝したそうです。それ以来、両親からそれぞれに「ママに感謝」「パパが優しいの」など、ラブラブいちゃいちゃなLINEが届くようになりました。ごちそうさまです。

母がひどい夏バテ……言い換えて、自律神経失調症になったのは、そういった心労もあったのでしょうか。どちらかと言えば、心情的には母の方が深刻でした。多汗症や不眠、食欲減退などに加えて、やろうとして

いたことを忘れがちになり、今まで手際よく出来ていた家事がうまく出来なくなっていました。誰だつてうまく出来ないことはあるものだと言っても、母はそもそもがハイパー・テキパキウーマンなので、少しの変化が相当堪えたのです。

母は私と婦人科へ行ったり気晴らしに遊び行ったりし、母の友人たちの支えもあって、徐々に回復しました。なによりも、父との“愛を取り戻した”後でよかったです。父が体調を崩した母にちゃんと優しく出来たのです。これは我が家において、大いなる進歩と言っているでしょう。具合が悪くなる順番が逆じゃなくてほんとに良かったねと、いつも母と話しています。

ところで私は今、初夏に公演予定の『ナビレラ』というミュージカルに向けて上演台本を書いています。韓国の漫画が原作で、韓国で舞台化、Netflixでドラマ化され、日本での上演は初めて。

『ナビレラ』は、70代のおじいさんがバレエをはじめのお話です。

老人に指導することになったのはプロを目指す若きバレエ・ダンサー。家族に反対され、周囲に嘲笑されながらも懸命に稽古に励む老人の、静かながらも熱い情熱に、はじめはいいや先生を引き受けた青年は徐々に心を動かされていく——そんな二人の夢と絆を描く物語です。

「反対されるのに、その年でバレエなんて怖くないんですか?」気遣う青年が尋ねると、ちっとも怖くないと、おじいさんは笑います。

「怖いのは、出来たことが出来なくなること。やりたかったことを忘れてしまうことだ」

夏に母が抱えていた不安を思い出しました。そして、父が母の愛を受け変化したことも思い出しました。

いくつになっても人は変えられる。成長できる。遅すぎることなんて、何もない。

両親の虫垂炎と夏バテに学んだ私は、しみじみそう思うのです。

知識製造業
三遠機材株式会社
http://www.san-en.co.jp

YOSHINO ASSOCIATES
吉野設計研究所
http://www.440a.co.jp

有限会社 魚伊
電話 52-5256

グロリアンピアノ地域特約店
白羽楽器 株式会社
電話 053-464-3015

ケンチク 701
KURONO ARCHITECT STUDIO
y.q.0170@gmail.com

看板広告 アラキスタジオ
豊橋市上伝馬町16 電話 52-5586番

本と文具なら
精文館書店
TEL.54-2345

ONOCOM なければつくる
株式会社オノコム

外科・内科・胃腸科・麻酔科・肛門科
医療法人栄真会 伊藤医院
豊橋市小池町字原下35 電話45-5283(代)

創業文政年間
日表 せきく宗
豊橋市新本町40 電話52-5473番

調理と製菓のおいしい資格。
豊橋調理製菓専門学校
豊橋市八町通一丁目22-2 TEL53-2809

豊橋銀行協会 (順不同)
三菱UFJ銀行 三井住友銀行 十六銀行 三井住友信託銀行 愛知銀行 静岡銀行 名古屋銀行 清水銀行 三十三銀行 中京銀行 大垣共立銀行

創業江戸 御茶屋菓子専門店
若松園
御菓子司

気まぐれコンサート
事務局 / 0532-62-9259 (小川)

安心・安全な地下駐車場
パーク500
プラット主ホール・アートスペース公演等へのお客様は30分150円を30分100円(上限4時間まで)に割引します。

整形外科・リハビリテーション科・リウマチ科
S医療法人 塩之谷整形外科
理事長 塩之谷 香
豊橋市植田町関取54 電話 0532-25-2115(代)

豊橋名産 **舟ちくわ**

井上皮フ科クリニック
診療時間 月・火・木・金 10:00~13:00 16:00~19:00
土 10:00~14:00 休診日=水・日・祝
電話 0532-55-7007 愛知県豊橋市向山町字中畑13-1マイルストーン1F

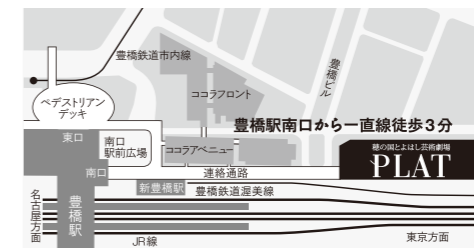
プラス・ワンの付加価値をお客様に提供いたします。
共和印刷株式会社
豊橋市小池町36番地の1 TEL46-3281 FAX46-3285

整形外科・皮膚科・リウマチ科・リハビリテーション科
医療法人 大岩整形外科・皮フ科
院長 大岩俊久 豊橋市大橋通二丁目115 電話55-2100

伝統的工芸品豊橋筆
書道用品専門店
高誠堂
豊橋市呉服町四拾四番地 電話52-5514

ISO 9001 ISO 14001 愛知ブランド企業 認証・認定取得
株式会社 三光製作所
三光精密工業株式会社
豊橋市佐藤一丁目12番地の3

sala
サーラグループ



私たちは穂の国とよはし芸術劇場の活動を支援しています。

- 株式会社アイゼロ
- 旭精機株式会社
- 株式会社イクモ
- 税理士法人イグラ会計
- イノチオホールディングス株式会社
- 株式会社エクステージ
- 大和田和恵
- 株式会社オリエント楽器
- 医療法人佳道会 藤城歯科医院
- 蒲郡信用金庫
- 川西塗装株式会社
- 河原崎 妙
- 株式会社呉竹荘ホテルズ 豊橋ステーションホテル
- 株式会社三光製作所
- 三光精密工業株式会社
- サーラエナジー株式会社
- 株式会社サーラコーポレーション
- 三遠機材株式会社
- 株式会社東雲座カンパニー
- 株式会社シュガーサウンド
- 大三紙業株式会社
- トヨタネ株式会社
- トヨネ株式会社
- 株式会社豊橋印刷社
- 豊橋芸術文化事業サポート株式会社
- 豊橋ケーブルネットワーク株式会社
- 豊橋信用金庫
- 豊橋鉄道株式会社
- 中野博三
- 早川直宏
- 株式会社平松食品
- 藤城建設株式会社
- 学校法人藤ノ花学園
- 株式会社豊川堂
- 松井商事株式会社
- 村田小児歯科センター
- 物語コーポレーション
- 有楽製菓株式会社 豊橋夢工場
- 若松園
- 匿名会員 1名 (五十音順)

〒440-0887 愛知県豊橋市西小田原町123番地
電話=0532-39-8810[代表](9:00-20:00)
開館=9:00-22:00 休館日=第三月曜・年末・年始。
第三月曜が祝日の場合はその翌平日。
豊橋駅(JR東海道新幹線、東海道本線、名古屋鉄道)、
新豊橋駅(豊橋鉄道渥美線)直結。豊橋駅南口から徒歩3分。
※駐車場はありません。公共交通機関をご利用いただくか、
お近くの公共駐車場等をご利用ください。

穂の国とよはし芸術劇場 **PLAT**